2016年3月9日（水）於 地球研講演室

「知はいかに跳躍するか？イノベーションの現場としての地球研」報告会

インダスプロジェクト
における知の跳躍

気候適応史プロジェクト
鎌谷かおる

プロジェクトリーダー　長田俊樹さん

はじめに

「知の跳躍」グループの目的

→過去の研究プロジェクトからまなぶ

①研究成果の価値

②文理融合型プロジェクトを円滑に進めるための作法

③研究と社会とのつながりを質的に評価する方法の開発

報告の目的

インダスプロジェクトの事例を通して、まなぶ、考える

→★研究者にとって「知」とは何か、それはどのように成長し、跳躍するのか

★プロジェクトにとって重要なことは何か、そのために何をすべきか

★プロジェクトリーダーには、何が求められるのか、何が必要なのか

★地球研とプロジェクトの関係

★地球研で跳躍した「知」とはなにか、それは今後どうなるのか

目標

地球研で「知がいかに跳躍したのか」という問題

＝地球研全体だけでなく、過去や今のプロジェクトでもなく、「自分自身の問題」

プロジェクトでの研究・自身の研究、共同研究における人間関係や研究の進め方等々を改めて見つめるきっかけになれば…

1、インダスプロジェクトの概要

「環境変化とインダス文明」プロジェクト（略称：インダスプロジェクト）は
2007年度～2011年度にかけて5年間実施
プロジェクトリーダーは、長田俊樹さん（現総合地球環境学研究所名誉教授）

インダスプロジェクトの目的

インダス文明の衰退原因を学際的に研究
インダス文明の衰退は、都市の発展を支えたと考えられる各地域の生業システムや、メソポタミアなどとの交易ネットワークの何らかの環境変化による影響が大きいと想定し、それを解明すべく調査研究を展開

プロジェクトの構成

物質文化研究グループ／伝承文化研究グループ／古環境復元研究グループ
生業研究グループ／DNA分析班

主な研究成果

インダス文明の特質解明－新たな解釈の提示

大河に依拠しない文明という新たな視点を提示／インダス文明には地域性があり、ドラスティックな気候変動などの環境変化で文明が衰退したとする環境決定論では衰退の説明がつかないことを指摘

インダス文明の衰退理由を探る

古環境研究グループによるララ湖のコアリングの成功（南アジア地域の気候変動データの国際的基準となるデータの取得）人骨・栽培植物の研究
複数の遺跡の発掘による地域の社会・文化・生業の実態調査

2、プロジェクトリーダーの知の跳躍

「研究者長田さん」が生まれる背景－変わったこと変わらないこと

・神戸に生まれ育つ

「関西人としてとにかく笑いがとれるというのは重要なことやね」

「子どものころはすごく気の小ちゃい女の子みたいな」

「はずれてると思わないけど、あんまりあわせようというのはないんですよ、基本的に。合わなきゃしょうがないじゃん。」

・高校時代

「やっぱりサラリーマンは、嫌だなと思った」

・北海道大学へ進学

「家に閉じこもってしまってはまずいと、一念発起して、北海道行ったんですよ。」

「あえて、探検部。」

・理学部から文学部への転部

・インドへの留学

６年の研究生活／言語学研究／ムンダ語／ムンダ人女性との結婚

日本での教員生活のはじまり

・友人の紹介で高校の国語教師

・国際日本文化研究センターの助教

・京都造形芸術大学の教員

2、プロジェクトリーダーの知の跳躍

2003年　地球研で研究スタート

・採用されてから、プロジェクトを起こす

「日髙さんがやる研究所で面白そう」

2003年10月～2004年3月　IS　2004年4月～2006年3月　FS

・PECの評価に悩まされる

言語学的手法の否定「地球研でやることだけは絶対許さない」

→新テーマ「環境変化とインダス文明」の誕生

・新メンバー獲得にむけた活動

→コアメンバー前杢英明さん増員による新たな展開

2007年度～2011年度　FR

2007年　研究環境の整備／基礎的な仕組み作り

→4つの研究グループ／インドでの発掘調査

2008年　研究の本格始動と新しい事実の発見

→インダス文明の衰退についての新しい見解

2009年　プロジェクトの意義／研究所内における存在意義を考える

→ララ湖でのコアリング成功／パキスタン大学とのMOU締結

2010年　様々なかたちの研究成果の発信／最終年度にむけた「終わらせ方」の模索

→国際シンポの開催／論文の量産化／データの分析／学会発表

2011年　研究成果の発信

→一般向け書籍の作成

2、プロジェクトリーダーの知の跳躍

長田さんの語りを通して見えてくるリーダー自身の知の跳躍とは

①「人に恵まれる」という才能
長田さんを取りまく人びと＝ありのままの長田さんが好き
例）日本での職と家を紹介してくれた峰岸さん・・・「動物園にはパンダが必要」
新婚時代の生活をサポートしてくれた北大探検部の仲間たち
研究を評価し熱心に後押ししてくれた日髙所長
自身の人脈をいかしプロジェクトの発展に大きく貢献した前杢さん
※長田さんの知の跳躍の背景・・・人間関係から得られる「恵み」

②「経験を活かす」という才能
インドでの留学生活から得たもの
＝ムンダ語の研究＋「インドとは」「インド人とは」を知る
「思ったようにいかないのがインド」（寺村さんのインタビューにて）
経験をいかした動き→インド人研究者との共同研究
インドでの発掘調査の実現
インド人の心をつかむ技術

2、プロジェクトリーダーの知の跳躍

長田さんの語りを通して見えてくるリーダー自身の知の跳躍とは

③人を理解しようとする姿勢
様々な研究分野で自由にメンバーが研究するというプロジェクトの方針
＝「不安はなかった」
日文研で得た経験ー「人間を選ぶ」日文研と「プロジェクトで選ぶ」地球研
「ディシプリンとは関係なく、何か中心のテーマがあって（略）それをどのようにしてまとめていけば、本になるとか、ストーリーとしてなるかということは、日文研で経験として積んでいた」
※大きなストーリーを描く方法

④自由と責任の絶妙なバランス
「自由にやってください」というスタンス／成果を待つという姿勢
ただし、何の成果を出してほしいかは、最初から提案しておくという方法
「必ず丸投げにしないというのもすごく大事なことだと思うんですよ」
※見えない手綱を5年間ひきつづけた長田さんの立ち位置こそが
プロジェクト成功のカギ

2、プロジェクトリーダーの知の跳躍

長田さんの語りを通して見えてくるリーダー自身の知の跳躍とは

⑤フットワークの軽さ
（前杢さん）「非常に好奇心の旺盛な方なんで」
＝あらゆる調査に顔を出す、話をする、考えを語る
※相手を知ることを、自身の考えを発信することが重要

⑥「人間関係を切る」という才能
プロジェクトメンバーとの人間関係
→プロジェクト進行のために必要か不必要かを見定めること
※「人間関係を作る」「人間関係を切る」どちらもできる才能

⑦「プロジェクトをやれたことはすごくよかった」と今でも言えること
「これまでやってこなかったことをやった」「何か得がたいものを得た」
「地球研で評価されなくても、評価してくれる人は何人もいる」
「プロジェクトメンバーは今でも集まって」
→守りに入っている地球研「やってみないとわからない」にかけてみる覚悟は？

3、プロジェクトメンバーたちの知の跳躍　コアメンバー前杢英明さん

前杢さんの語りを通して見えてくる知の跳躍とは

①長田さんに出会う前
- 太平洋岸の海岸地形と南海地震との関係を研究
- インドでの古環境調査＋南極の調査→今につながる人脈の獲得

②長田さんと出会って
- 突然の出会い「この人なら何とかできるんじゃないか」
- グループは私が人選して作った

③地球研の存在を知る
- 「理念は理念だけで結局は縦割りかな」でも、横のつながりはあった→今も続く交流

④地球研でしかできないこと
- 大きな予算：研究者が「面白がる」調査を実現
- インダスプロジェクトは「地球研らしいプロジェクト」

⑤地球研・プロジェクトが教えてくれたこと
- 自然地理学の研究の原点を考えること
- 「好奇心」を思い出させてくれた

⑥見えてくる地球研の課題
- データとデータをつなぐモデルの必要性
- 各分野の担当研究員の必要性
- 片道切符のプロジェクトリーダー
- 地球研的流動性は「誰もハッピーにならない」のか
- 終了プロジェクトの成果に誰が責任をもつのか

3、プロジェクトメンバーたちの知の跳躍　プロジェクト研究員寺村裕史さん

寺村さんの語りを通して見えてくる知の跳躍とは

①長田さんに出会う前

・「やってみたいと思ったことをやってみよう」・・・考古学の世界へ／埴輪の研究

・GISとの出会い

②長田さんと出会って

・「どういうことをやってほしいって、あんまり言われた記憶はないんですよね」

・物質文化研究グループを担当／GISを通して他のグループやプロジェクトとも交流

③地球研の印象

・「怖いとこやなっていうイメージしかなかった」

④地球研での日常

・「地球研に雇われてるというよりは、プロジェクトに雇ってもらっているという意識が強かった」

⑤地球研での研究環境

・「結構好きにやらせてもらえたので」
「ありがたかった」

⑥あの頃を振り返ってみて

・「プロジェクトの最初の段階から、きちっと地球研としての目標があって、その中でこのプロジェクトはどういう役割を担ってるっていうところ」を、リーダーや執行部だけでなく研究員も意識をある程度もつことは必要

4、プロジェクトの知はいかに跳躍したか

３人の語りを通して見えてくるプロジェクトの知の跳躍とは

①修正し続けるシナリオとハッピーな結末

５年間のプロジェクトは「シナリオ」「ストーリー」

・FS段階でのPEC評価→言語的手法から「文明環境史」分析へ
・新規メンバーの発掘（前杢さんの活躍）
・人間関係を切る選択
・研究班の途中追加
・目に見える成果の発信と、右肩上がりの評価
・「何がおこるかわからないインド」

②自由が生み出す「新たな研究」

３人の語りに登場する「自由」「好きにやってください」

・自由と責任の絶妙なバランスをもったリーダーの存在
・大きな予算だからこそできることを実現＝研究者の「好奇心」を高める

③終了してなお続く関係

・成果物の発信（書籍／論文／データを利用した新たな研究）
・様々な交流（リーダーとメンバー／メンバー間）
・メンバーのその後の研究への影響（研究テーマ／プロジェクト研究）

5、インタビューを振り返って―「知の跳躍グループ」で得たもの

①他人を知ることは自分を知ること

村松さん「プロジェクトを運営していくときに、どういうコツがあって、どういう失敗があって、それをどうやって克服してきたかっていうことを知りたい」「歴史家ですから、過去のことを知るっていうのそれ自身にも好奇心があって」

菊地さん「プロジェクトの期限決まってるじゃないですか。それとその次の異動がうまく接続できればいいんですけど」「そういう人事の問題では非常に多分おっきな問題があるのかな」「非常に曲がり角なんだと思うんですよ」

→インタビューを通して得た「気づき」

メンバーが地球研について思うこと

・私にもやって来る「地球研を去る日」それまでに、いかに研究を進められるか、地球研に何を残せるか、プロジェクトとして何を残していくべきか改めて考える機会に

5、インタビューを振り返って―「知の跳躍グループ」で得たもの

②知はいかに跳躍するのか

・終了プロジェクトからまなべること
→知を跳躍させるチャンス
「始まっては終わるプロジェクトの繰り返し」
を見過ごしてまわないように
※知の跳躍プロジェクト

・リーダーに求められる才能とは

・プロジェクトの知の跳躍は誰にどのように引き継がれるのか

・地球研にとってのプロジェクト研究とは、プロジェクトにとっての地球研の存在とは

さいごに

ささやかな希望

・・・来年もし、この取り組みがあれば、村松さんにインタビューをしてみたい